

保育者養成における音楽教育の基礎研究 4

——異文化間における音楽的感性の違いと異文化の音楽教育への応用——

岩口 摂子* 横山由美子**

本研究の目的は、日本人とインドネシア人の音楽的感性の違いが、民族によって説明できるかを中心に検討し、ガムランを使った異文化の音楽教育方法への糸口を見つけることである。日本人の大学生 ($n=83$) とインドネシアの大人 ($n=47$) を対象に、西洋音楽とバリ・ガムランを聴いて、曲の感情評定 (高揚, 強さ, 荘重, 陰鬱, 軽さ, 親和, 曲の好み) をしてもらったものと音楽的特性との関連を、重回帰分析によって検討した。その結果、両民族で同じ音楽的特性に反応をしていたのは「高揚」だけで、その他の感情因子では異なっていた。今回の結果では、民族間で音楽的感性の違いが認められたものの、異文化の音楽に対する感情評価尺度のさらなる検討と、音楽を変えての追試が必要である。またどちらの音楽でも音楽に対する好みは、日本人よりインドネシア人の方が有意に高かった。異文化の音楽への受容力と好みを高めていくことは、今後の音楽教育での重要な課題となろう。

キーワード：異文化の音楽、西洋音楽、バリ・ガムラン、民族、音楽的特性、情緒的反応

1. はじめに

近年の外国人登録者数の増加とともに、保育・教育の現場では、年々、外国籍の子どもを預かるケースが増えつつあり、多文化保育・多文化教育への関心が高まってきている。多文化教育は、文化多元主義にもとづく教育運動として、1970年代以降世界的に広がったもので、多文化共生のための資質形成を目的としている。多文化教育は、その国の文化以外の文化が多面的に存在することによって起る教育課題を扱っており、国外の文化理解を深めるための、いわゆる異文化教育や国際理解教育とは区別されている。バンクス (1999; 3) は、多文化教育は単に「他者、あるいは外部集団について理解したり、学んだりすること」だけではなく、「人びとが自分たちをよりよく見つけ、理解する機会を提供する」と述べ、自文化への再認識と評価の重要性を強調しているが、この

点においては、異文化教育の志向性も変わるところはなく、多文化教育をする上で、異文化教育はその基礎となり得る。米国のような多民族・多文化国家でない日本では、多文化保育・教育は喫緊の課題ではないが、既に多文化保育・教育を行っている保育所、幼稚園、学校も存在するので、保育者・教育者の養成機関においても、異文化理解や国際理解のための何らかの取り組みがなされることが望ましい。

多文化教育を課題とする国々では、音楽教育の分野でも、1970年代以降、異文化の音楽への関心が高まってきた。Volk (1993) は、1967年から1992年までの全米音楽教育者会議 (MENC) の動向と、その公式雑誌である MEJ (the Music Educators Journal) に掲載された、異文化の音楽教育に関わる論文、書評、特集、MENC とそこで行われたシンポジウムの内容について概観しているが、1970年代から様々な異文化の音楽の紹介が行われ、1980年代にはその関心は、異文化の音楽の

*相愛大学人間発達学部子ども発達学科

**相愛大学人間発達学部子ども発達学科非常勤講師

教授法や教材の開発に発展し、併せてそれに携わる教師養成も課題となった。その成果として、子どもたちは、異文化の音楽に関する知識を増やすだけでなく、それらの音楽を作った人々にも関心を向けることができるようになったと述べている。1990年に開催されたMENCではすべての小学校、中学校のカリキュラムに多様な文化の音楽教育を組み入れていくよう求めていくと宣言され、1994年に発表された全米芸術教育標準(National Standards for Arts Education)では、既に幼稚園の音楽プログラムの中の鑑賞教材に、多様な文化を表す様々な様式の曲を扱うようにとされている。

日本の義務教育における異文化の音楽の取り扱い、新しい学習指導要領において、小学校第3学年と第4学年以降の「鑑賞教材」の記述の中で見られるが、中学校の段階でも、明確な指導観や幅広い音楽観を持って異文化の音楽の指導をしている教師は少ない(川北, 2006)と見做されており、異文化の音楽教育は諸外国と比べ立ち遅れている感は否めない。

アメリカやカナダをはじめ、多文化保育・教育を実践している国の多くで、音楽教材として多く用いられているのは、インドネシアのガムランである。イギリスではガムランは、1970年代に伝わり、楽器や洗練され秩序立ったリズム、メロディの構造、演奏技術が創造的音楽学習に有効なものとして、現在、小中学校の公式な音楽教育の一環として指導計画に組み入れられている(Hennessy, 2005)。またガムランの、他者の音楽の感じ方を想像することによって、対になった人と同調し、さらにグループの中での自分の役割を見つけていくといった演奏のあり方は、社会的スキルの獲得にもつながっていくと考えられる。イギリスでは、地域の大人が集まってガムランを演奏していく過程で、音楽的スキルだけでなく、社会的なコミュニケーションスキルも向上したということが報告されており(MacDonald & Miell, 2000)、音楽教育的な側面以外での効用も認められている。そのような教育的観点と、ガムラン

が、日本を含む東アジア地域の音楽とは異なる独特の音階や音楽構造を持ち、楽器や演奏形態等の特徴も捉えやすい点で、異文化の音楽教育の導入教材として日本人にも適していると考え、2009年、本学子ども発達学科では、バリ・ガムラン公演を開催した。また鑑賞による教育に留まらず、ガムランを積極的に使った、異文化音楽教育の可能性を摸索するために、日本の学生のガムラン音楽に対する情緒的反応を、ガムランを民族音楽とするインドネシア人と対比しながら、西洋音楽との比較において測定・分析し、異文化の音楽教育を進めていく上での基礎資料を収集することにした。音楽教育のプロセスの中で、教育する対象の音楽的感性を客観的に測ることは、重要だからである。

音楽への情緒的反応に関する研究は、多文化音楽教育への関心の高まりとともに盛んに行われるようになった。音楽への情緒的反応の中でも、音楽的好みに関しては、音楽の学習をする上で重要なモチベーションになると考えられており、音楽教育の主要な学術誌でもっとも多く見られる論題でもある(Fung, 1996)。そこで得られた知見の中では、音楽的好みには聞き手の文化的環境も影響(Leblanc, 1987)することが示唆されている。また「ある特定の文化集団に属する個人は、ある特質をもった音楽がある気分を表し、一方、他の特質をもった音楽が他の気分を表すということを、学習」(ラドシー&ボイル, 1985; 181)する、「音楽において表現されるような気分は、一般的な文化化の過程の一部として学習される」(ラドシー&ボイル, 1985; 188)と言われるように、聞き手の文化的環境は、情緒的反応に影響すると考えられてきた。しかし一方、非西洋音楽を使った聴取実験で、音楽が持つ情緒の意味は、その音楽への熟知性の有無に関わりなく、音楽的特性に現れる音響的な側面から捉えられる(Balkwill, Thompson & Matsunaga, 2004)という報告もあり、音楽への情緒的反応については未だ普遍化して言える段階ではない。

ところで非西洋音楽で、音楽的好みと音楽的特

性との関連や、音楽への情緒的反応が調べられたものはきわめて少ない (Fung, 1996 ; Balkwill, Thompson & Matsunaga, 2004)。西洋音楽では、ある情緒が特定の調性に強く関連し、音の中心性やハーモニーの協和性も音楽的特性に数えられていたが、非西洋音楽を扱うときには、何が音楽的特性としてあげられるのかから考えなければならない。先行研究において、音楽的特性として項目があげられたものには、調性、音の中心性、ハーモニーの協和性以外に、テンポ、音量の大きさ、音楽の複雑性、メロディ、リズム (の規則性)、音質の明瞭さ、音高の幅、雰囲気 (mood)、歌詞、ユーモアのセンス等があり、また音楽の好みに関しては、上記の音楽的特性以外に、聞き手の属性 (性、年齢、人種、成熟度、音楽家／非音楽家) や、音楽への親近性 (Familiarity) との関連が指摘されてきたことも、本研究に参考にできるであろう。

以上のことを踏まえて本研究では、西洋音楽とバリ・ガムランにおける、日本人とインドネシア人の音楽的感性の違いが、民族¹⁾によって説明できるかを中心に検討し、ガムランを使った異文化の音楽教育方法への糸口を見つけることを目的とする。

2. 方法

本研究は2つの分析、すなわち、日本の学生が生のバリ・ガムラン公演を聴いてその印象を記述したものの分析と、日本とインドネシアの2つの民族の音楽的感性の測定と分析から構成されている。

(1) レポートの分析について

バリ・ガムラン公演は子ども発達学科の1年生を主な対象者として2009年6月19日(水)、本学南港ホールで開催された。公演者は、10年以上のキャリアがあり、日本とインドネシアの2国間の行事で演奏した経験を持つ演奏者集団であり、曲目は、バレ・ガングジュール、サラスワテ

イ、グスリ、チョンドン (レゴン・クラトン・ラッセムより) の4曲で、4曲目は舞踊を伴うものであった。視聴した学生には演奏後、楽器を体験できるワークショップも設けられた。ガムランに対してどのような印象を持ったかを知るために、子ども発達学科の学生には、事前にレポート課題を配布し、公演後にそれを提出させることにした。レポートを書かせる目的には、先にレポート課題を提示することによって、テーマを持って公演を視聴させたいという意図も含まれている。レポートの課題は、①バリ・ガムラン公演を視聴して、楽器や演奏や伝承方法の観点から、今まで接してきた音楽との差異について600字以上で述べる、②ガムラン公演を視聴しての印象を、音楽を中心に10個以上の言葉で表現する、というもので、公演の1週間後(6月26日)を締め切りとして、70人分が回収された(回収率は参加学生の75.3%)。回収されたレポートでは、1つめの課題に関しては、公演前に演奏者から、楽器や演奏に関わる参考資料が配布されていたので、その資料に即してまとめられたものが多かった。2つめの課題の方は、直観的な印象を端的な言葉で表すものなので、各学生のレポートの記述のまま、形態素解析によって、キーワードの抽出を試みた。その際、酷似した内容も複数あり、同一と判断されるものについては削除したので、分析対象としたのは最終的に66となった。

(2) 音楽的感性の測定について

a. 被験者

日本人の被験者は、子ども発達学科1年次開講の講義系音楽科目(保育士資格取得のための選択必修科目)の受講生と、任意で参加してくれた同学科の学生計83名(男29名女54名)で、調査実施日である2009年7月22日の平均年齢は19.1歳($SD: .822$)であった。一方、インドネシア人の方の参加者は47名(男6名女41名)で、その多くは大学生であった。調査実施日は8月11、14、31日と9月1日で、調査の初日の平均年齢は、25.1歳($SD: 7.11$)である。

b. 使用した音楽、音楽的特性の項目、感情評定の項目

西洋音楽とガムランに共通する音楽的特性や分析方法を考える上で、Kratus (1993) の実験を参考にすることにした。これは、6 歳から 12 歳の小学生が J. S. バッハ作曲ゴールドベルク変奏曲（グレン・グールドのピアノ演奏）を聴いて、うれしい－悲しいと興奮－静かの 2 種類の情緒の評価をするもので、音楽的特性の項目としてアーティキュレーション、音量の大きさ、リズムの活動性、拍の強さ、テンポがあげられており、実験に用いられた全ての曲で、これらの項目ごとに音楽の専門家によって 5 段階の評価がなされ、それらの平均値と子どもが点けた 2 種類の情緒への評定の平均によって、音楽的特性と情緒への反応との関連性が重回帰分析によって検討されたものである。本実験でもこの実験のように、使用する音楽は、相互比較のために曲想に統一感があるものが望ましく、またガムランがいろいろな楽器の合奏形態であることを考慮して、西洋音楽の方は弦楽合奏に編曲された J. S. バッハ作曲／ドミトリ・シトコベツキ編曲のゴールドベルク変奏曲の中から 12 曲を選ぶことにした。音楽的特性の項目

は、Kratus の用いたアーティキュレーション、音量の大きさ、リズムの活動性、拍の強さ、テンポのうち、拍の強さに関しては、非西洋音楽では拍の把握が難しいと想定されたので、拍の強さを除く、4 つの項目を音楽的特性とした。ガムランの方もこれらの音楽的特性に応じて、同じ曲数を選んだ。回答者の負担を少なくするため、各民族をさらに 2 つに分け、曲の方もゴールドベルク、バリ・ガムラン、それぞれ 6 曲ずつに分けて、曲の構成が 2 つのグループ間で近いものになるようにして、回答者にはゴールドベルクの 6 曲に続いてガムランの 6 曲の計 12 曲を聴いてもらった。聴取時間は、曲の特徴がもっとも現れている部分を聴いてもらったので、46 秒から 2 分以内であった。1 グループに聴いてもらった曲は、ゴールドベルクの Aria, Var. 10, Var. 14, Var. 4, Var. 20, Var. 5, 続いてガムランのタルナジャヤ、タブガリ（スマルプグリンガン）、マヌック・ラワ、ゴロ・マルダウォ（中間の速い部分）、プスパレスティ（テンポの遅い部分）、スカル・ギノタン、2 グループに聴いてもらったのは、ゴールドベルクの Var. 25, Var. 22, Var. 26, Var. 23, Var. 29, Var. 15, 続いてガムランのジャラン・テジ、オレッグ・タ

表 1 ゴールドベルグで評価された音楽特性の項目間の相関係数

	テンポ	音量の大きさ	リズムの活動性	アーティキュレーション
テンポ		.798**	.918**	.871**
音量の大きさ			.682*	.639*
リズムの活動性				.928**
アーティキュレーション				

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 2 ガムランで評価された音楽特性の項目間の相関係数

	テンポ	音量の大きさ	リズムの活動性	アーティキュレーション
テンポ		.963**	.977**	.966**
音量の大きさ			.955**	.927**
リズムの活動性				.933**
アーティキュレーション				

** $p < .01$

ムリリンガン、カタッ・ンゴケツ、ブスバレスティ（中間部・ギラッの部分）、レゴン・クラトン・ラッセムよりチョンドン、ゴロ・マルダウォ（冒頭部分）であった（使用したガムラン音楽は巻末に掲載）。

感情評価に関しては、谷口（1995 a）の作成した音楽作品の感情価測定尺度（Affective Value Scale of Music；AVSM）を参考にして、6つの感情因子から構成されるAVSMの中から、各感情因子の代表的な言葉として、「楽しい」「強い」「おごそかな」「悲しい」「軽い」「やさしい」を使うことにした。評価はリカート方式の5段階評価（5よくあてはまる－1全くあてはまらない）で、最後にその音楽への好みの程度も5段階評価で尋ねた。

各曲の音楽的特性の評価は、子ども発達学科のピアノ実技講師7人に音楽の専門課程を卒業した2人を加えて各曲を聴いてもらい、それぞれの項目で5段階評価（アーティキュレーション：スタカート1－なめらか5）、（音量の大きさ：弱い1－強い5）、（リズムの活動性：少ない1－多い5）、（テンポ：遅い1－早い5）してもらって、各曲で項目ごとに平均点を出しておいた。それらの平均点を用いて、音楽的特性の項目間でピアソンの相関係数を算出したものをゴールドベルクは表1に、ガムランは表2に示した。表1、表2より、ゴールドベルクもガムランも、項目間の相関は高いと言える。

3. 結果

(1) キーワードの抽出

形態素解析にはSPSS Test Analysis for Surveysを、その他の統計処理に関してはSPSS 15.0 Jを使用した。

2つめのレポート課題では、印象を表す形容詞が多く出現することを期待したが、文章として感想が書かれていたものが多かった。したがって単体では意味をなさない多くの言葉（いる、ある、なる、する、思う、知る、できる、少し、たくさ

ん、それぞれ、全く、かなり、ほとんど、等）の出現をみたので、まずそれらを不要語として削除した。次に同じような意味の言葉（聞き入ると入り込む、メロディと旋律線、想像以上と意外、迫力とダイナミック、リズムカルとリズムがよい、印象的と印象が深い、驚いたとびっくりした、等）を類義語としてまとめ、さらに対極の意味を表す言葉や一つのカテゴリーにまとめられる言葉は、次のようにカテゴリー化した。すなわち、楽器→楽器、打楽器、木琴、太鼓、金槌みたいな楽器、速度→速い、遅い、テンポ、国→国、日本、バリ、音の高さ→低音、高音、大きさ→大きい、大きな、小さい、演奏の役割→パート、役割、指揮者、重なり→重なり、ずれ、ハーモニー→ハーモニー、音程、明暗→明るい、暗いである。そのような手続きを経て、4回以上の出現頻度のあった言葉を表3にまとめた。なお同じ言葉が、1人の記述の中で、複数回使われている場合、度数は1としている。

表3より楽器、音、音楽、演奏という言葉の出現が多かったので、残りの言葉を、音響面、音楽面、演奏面に関連づけて分類すると、音響面では、響く、残響、音の高さ、音色、重なり、強弱などが、音楽面では、リズム、速度、メロディ、沖縄、繰り返す、民族音楽、ハーモニー、音階、民謡、民族的、明暗などが出現していることから、音の高さと重なり、音色、残響、対照的な強弱を特徴的と感じ、音楽を構成する要素や形式の特徴も、ある程度感じ取っているのではないかと思われた。その中でも音楽の3要素では、リズムがもっとも印象に残り、次いでメロディ、ハーモニーの順であった。音階が民族特有のものであることを知らないまでも、民族的な感じを音楽の響きの中に聴いており、沖縄の音楽との参照も8件あった。演奏面では合う、リズム感、止める、力強い、迫力、激しいなどの言葉が出現した。音の残響との関連から「止める」という演奏上の行為と躍動感、「力強い」に象徴されるようなエネルギーなイメージが強かったようである。先の分類に属さない言葉は、踊る、衣装、動きなどの

表 3 形態素解析によって抽出されたキーワード

(カッコ内、出現頻度)

楽器 (54), 音 (39), リズム (35), 音楽 (33), 演奏 (32), 独特 (29), 違う (24), 驚いた (24), 踊る (20), 綺麗 (17), 合う (17), 速度 (16), 不思議 (14), 響く (14), 国 (14), 残響 (13), 音の高さ (13), リズム感 (13), 難しい (12), 止める (12), 大きさ (12), 同じ (11), 初めて (11), 演奏の役割 (11), メロディ (11), 力強い (10), 衣装 (9), 印象的 (9), 今 (8), 華やか (8), 動き (8), 沖縄 (8), 繰り返す (8), 楽譜 (8), 音色 (8), 似ている (8), 演奏者 (7), 変わる (7), 民族音楽 (7), 迫力 (7), 間隔 (6), 良い (6), 派手 (6), 激しい (6), 重なり (6), ハーモニー (6), 自然 (5), 音階 (5), 手 (5), 強弱 (5), 気持ち (5), 形 (5), 民謡 (4), 一定 (4), 心地よかった (4), 民族的 (4), 体 (4), 明暗 (4)

視覚的な言葉や、独特、綺麗、不思議、難しい、華やか、良い、派手、心地よかったなど、何らかの評価に関わる言葉で、公演が学生に新鮮で強い印象を与えたことをうかがい知ることができる。

(2) 曲への情緒的反応と音楽的特性との関連について

音楽の専門家によって評定された、各曲のアーティキュレーション、音量の大きさ、リズムの活動性、テンポの4項目の平均点を説明変数に、それぞれの民族の学生がつけた各曲の高揚、強さ、荘重、陰鬱、軽さ、親和の平均点および好みの平均点を目的変数にしてステップワイズ法による重回帰分析した結果が、表4と表5である。

ゴールドベルクで両民族が同じだったものは、「高揚」「荘重」「陰鬱」で、すべてアーティキュ

レーションの影響が強かった(「高揚」はレガートの方、「荘重」「陰鬱」はスタッカートの方)。民族で異なったのは、「強さ」に影響している音楽的特性が、日本人は音量の大きさ(大きい方)、インドネシア人はテンポ(速い方)、また「軽さ」に影響していたのは、日本人はアーティキュレーション(レガートの方)で、インドネシア人の方で影響している音楽的特性はなかった。「親和」では日本人は音量の大きさ(小さい方)、インドネシア人はテンポ(ゆっくりの方)であった。また「好み」は日本人のみアーティキュレーション(レガートの方)の影響が強く、インドネシア人の方で影響している音楽的特性はなかった。また好みの得点を目的変数に、各感情因子を説明変数にして重回帰分析をしたところ、日本人では高揚 $\beta = .899^{***}$ (調整済 $R^2 = .79$)、インド

表 4 ゴールドベルクにおける重回帰分析の結果(ステップワイズ法による)

感情因子	民族	予測変数	標準化係数 β	調整済 R^2
高揚(楽しい)	Japanese	アーティキュレーション	.854***	.702
	Indonesian	アーティキュレーション	.909***	.809
強さ(強い)	Japanese	音量の大きさ	.944***	.880
	Indonesian	テンポ	.976***	.948
荘重(おごそかな)	Japanese	アーティキュレーション	-.934***	.86
	Indonesian	アーティキュレーション	-.964***	.922
陰鬱(悲しい)	Japanese	アーティキュレーション	-.859***	.711
	Indonesian	アーティキュレーション	-.913***	.817
軽さ(軽い)	Japanese	アーティキュレーション	.704*	.445
	Indonesian	—	—	—
親和(やさしい)	Japanese	音量の大きさ	-.671*	.395
	Indonesian	テンポ	-.957***	.908
好み(すき)	Japanese	アーティキュレーション	.583*	.274
	Indonesian	—	—	—

$*p < .05$ $***p < .001$

表5 ガムランにおける重回帰分析の結果（ステップワイズ法による）

感情因子	民族	予測変数	標準化係数 β	調整済 R^2
高揚（楽しい）	Japanese	音量の大きさ	.882***	.755
	Indonesian	音量の大きさ	.959***	.912
強さ（強い）	Japanese	音量の大きさ	.875***	.741
	Indonesian	音量の大きさ	.963***	.92
荘重（おごそかな）	Japanese	テンポ	-.915***	.82
	Indonesian	音量の大きさ	-.939***	.869
陰鬱（悲しい）	Japanese	リズムの活動性	-.920***	.832
	Indonesian	テンポ	-.958***	.909
軽さ（軽い）	Japanese	—	—	—
	Indonesian	アーティキュレーション	-.772**	.556
親和（やさしい）	Japanese	音量の大きさ	-.743***	.507
	Indonesian	テンポ	-.948***	.889
好み（すき）	Japanese	—	—	—
	Indonesian	—	—	—

*** $p < .01$ ** $p < .001$

ネシア人では軽さ $\beta = .705^*$ （調整済 $R^2 = .446$ ）と、好みに関与する感情因子が異なっていた。また、各自のゴールバルクにおける好みの得点を合計した得点を、民族間で有意差があるか t 検定したところ、日本人の平均点が 21.69 ($SD : 3.316$)、インドネシア人が 24.55 ($SD : 3.669$) で、インドネシア人の方が有意に高かった ($t = 5.197$, $df = 159$, $p < .001$)。

一方ガムランでは、「高揚」と「強さ」で、どちらの民族も音量の大きさ（大きい方）が強く影響していた。「荘重」は、日本人ではテンポ（ゆっくりの方）が、インドネシア人では音量の大きさ（小さい方）が影響していた。「陰鬱」でも、日本人はリズムの活動性（少ない方）、インドネシア人はテンポ（ゆっくりの方）と、影響している因子は異なった。「軽さ」では、インドネシア人のみアーティキュレーション（スタッカートの方）が影響しており、日本人の方では影響している因子はなかった。「親和」では、日本人では音量の大きさ（小さい方）が、インドネシア人はテンポ（ゆっくりの方）が影響しており、「好み」に影響している感情因子および音楽的特性は、両民族ともなかった。

ゴールバルク同様、各自のガムランにおける好

みの得点を合計した得点を、民族間で有意差があるか t 検定したところ、日本人の平均点が 15.37 ($SD : 4.702$)、インドネシア人が 21.16 ($SD : 4.97$) で、インドネシア人の方が有意に高かった ($t = 7.641$, $df = 161$, $p < .001$)。

(3) 日本の学生のガムランにおける好みの得点とレポートの記述との関連

被験者の日本の学生で、且つバリ・ガムランの公演を視聴した者を対象に、ガムランの好みの総得点（各ガムラン曲の好みの得点を合算したもの）と、レポートに書き表したキーワードとの関連をみたところ、好みの総得点の高さと「明暗」（明るい・暗い）($r = .291$, $p < .05$)、「音色」($r = .333$, $p < .05$)、「激しい」($r = .277$, $p < .05$)という3つの言葉との間で、相関がみられた。

4. 考察

バリ・ガムランの公演を視聴した学生のレポートから、音響面や音楽面では音の高さと重なり、音色、残響、対照的な強弱、音階を特徴的と感じていたようだった。音楽の3要素の中では、リズムがもっとも印象に残ったようである。演奏面で

は、音の残響との関連から「止める」という演奏上の行為と躍動感、「力強い」に象徴されるようなエネルギーなイメージが強く、「独特」「綺麗」「不思議」「難しい」「華やか」「良い」「派手」「心地よかった」などの評価に関わる言葉の出現から、強い印象の中にも、肯定的な受けとめ方がなされたのではないかと思われる。また日本人の被験者で、且つバリ・ガムランの公演を視聴した者の中では、「明暗（明るい・暗い）」「音色」「激しい」という言葉で印象を捉えていた学生の、好みの総得点が高いという知見も得られた。

音楽に感じる情緒に、どのような音楽的特性が関与するかは、2つの民族で同じ場合と異なる場合があった。「高揚」は、どちらの民族もゴールドベルクではアーティキュレーション、ガムランでは音量の大きさに反応している。「強さ」では日本人はゴールドベルク、ガムランともに音量の大きさに反応しているが、インドネシア人はゴールドベルクではテンポに、ガムランでは音量の大きさに反応している。「荘重」「陰鬱」ともゴールドベルクでは、どちらの民族ともアーティキュレーションに反応しているが、ガムランでは「荘重」は、日本人はテンポ、インドネシア人は音量の大きさ、「陰鬱」は、日本人はリズムの活動性、インドネシア人はテンポと影響している因子が異なった。リズムの活動性からの影響があった感情因子は、ガムランの日本人の「陰鬱」だけであった。「軽さ」はゴールドベルクではインドネシア人は反応している音楽的特性はないが、日本人の方はガムランで反応している特性はない。ゴールドベルクで日本人が「軽さ」に反応した音楽的特性は、アーティキュレーションのレガートの方で、ガムランでインドネシア人が「軽さ」に反応したのは、アーティキュレーションのスタッカートの方であった。「親和」では日本人はゴールドベルク、ガムランとも音量の大きさに反応しているが、インドネシア人はどちらの音楽でもテンポである。

ガムランの「高揚」で、音量の大きさとの関連

が強かったことは、多くの先行研究の結果を裏づけるものである。しかしこの実験で得られた、ゴールドベルクの「高揚」とアーティキュレーションとの関連は、Kratz (1993) の実験結果を支持するものながら、両民族とも、他の感情因子でもアーティキュレーションとの関連が強かったのは、バロック音楽であることや弦楽器編成の曲であったことも一因として考えられる。また音楽のみならず、感情評価尺度についても問題が残る。AVSM は、日本人によるクラシック音楽の聴取によって作成されたものであり、評価項目としてあげられた言葉のもつニュアンスが両民族で異なっている可能性も否めない。これらの結果は、音楽が持つ情緒的意味は、音楽的特性に現れる音響的な側面だけでは捉えきれないという可能性と、情緒として聴きとっている音楽的特性が民族で異なるという2つの可能性を示しており、異文化音楽に対する AVSM の適応性の確認とともに、音楽を変えてさらに追試する必要があるだろう。

「好み」と音楽的特性の関連ではゴールドベルク、ガムランを通して、日本人のみゴールドベルクでアーティキュレーションの影響が強かったが、インドネシア人で「好み」に影響しているものはなかった。また好みの得点を目的変数に、各感情因子を説明変数にして重回帰分析をしたところ、ゴールドベルクでは日本人は「高揚」が、インドネシア人は「軽さ」が影響していたが、ガムランでは日本人だけでなく、インドネシア人の方も、好みに関与する感情因子はなく、使用したガムラン音楽が、聴取の際に捉えどころが少なく、インドネシア人にとっても、新奇であったのかもしれない。ただし、ゴールドベルク、ガムランとも好みの得点は、インドネシア人の方が日本人より有意に高かった。

音楽的な好みは音楽教育にとって重要なモチベーションとなることは先に述べたとおりであるが、音楽的な好みを高めることは、異文化の音楽教育にとっても有用である。多文化教育が盛んなアメリカ在住の日本人の子どもと大人は、日本にいる日本人の生徒より、非西洋音楽に対して、よ

り肯定的 (Nakazawa, 1988) であり、それはアメリカ在住の日本人は、日本とアメリカの両方の文化の中で、より多様なタイプの音楽に接しているからと考えられている (Brittin, 1996)。しかし異文化の音楽が馴染みがなく (unfamiliar)、複雑で、初めのうちは嫌いであっても、繰り返し聴くことによって好みを高めることができ (McKoy, 2003)、教えた場合には、教えない場合よりも好みが有意に高くなる (Shehan, 1985) と言われている。さらに講義や視聴覚教材、鑑賞による受動的な学習をするよりも、歌や楽器などの演奏を重視した教育方法をとおして、異文化の音楽への好みが高まった (Shehan, 1984) という事例などから、異文化の音楽へのより積極的な関わりが期待される。他方、異文化の音楽に対して音楽家の方が非音楽家より、好みの得点が有意に高いという Fung (1996) の実験結果では、基本的な音楽的能力が異文化の音楽を理解する上で重要であることを示唆している。その音楽を音楽的に把握する力が基礎となり、それがその音楽への関わりのモチベーションにつながっていくと考えられるからである。多文化保育・教育に関わる可能性が高い学生への音楽教育では、偏りなく異文化の音楽を受容できるような力を涵養するための、様々な異文化の音楽を用いた多角的な教育的アプローチとともに、音楽の基礎学習の積み重ねが求められる。

今回、学科で鑑賞し実験に使用したガムランは、五線譜を用いず、基本的には口承と模倣によって行われるもので、西洋音楽の学習システムとは大きく異なっている。ガムランでは状況に応じてアンサンブルが変化していくため、演奏の過程では、他者が奏でようとする音楽を聴き、全体の音楽の方向性を把握しながら、自分のパートを演奏していくためのアンサンブル力が求められる。さらにガムランでは楽譜を使用しないために、仲間同士での教え合いが起こる。桂 (2002) は異文化理解の本質について「相手の国のことを理解するということは、その人が何を感じるのか、なぜそう思うのかを想像しようとすることに他ならな

い」と述べているが、ガムランの「音楽を通じて相手の心を読む力を養う」(皆川, 1998; 77) 学習のあり方は、まさに人間関係力の育成を図る上でも効用をもたらすものと思われる。今後は、保育者養成の音楽教育においても、ガムランの積極的な導入を検討していきたい。

注

- 1) 日本人とインドネシア人は、国が異なるとともに民族も異なる。民族の定義については「文化の伝統を共有することによって歴史的に形成され、同族意識をもつ人々の集団」で、「人種・国民の範囲とも必ずしも一致しない」(岩村出編『広辞苑』第3版 岩波書店 1990) とされるが、日本語の「民族」は英語の nation を含む概念であることに従い、ここでは民族という言葉を使用している。

引用文献

- Balkwill, L., Thompson, W. F. & Matsunaga, R. 2004 Recognition of emotion in Japanese, Western, and Hindustani music by Japanese listeners. *Japanese Psychological Research*, 46-4, 337-349.
- バンクス, J. A. 平沢安政訳 1999 『入門多文化教育－新しい時代の学校づくり－』 明石書店
- Brittin, R. V. 1996 Listeners' Preference for Music Other Cultures: Comparing Response Modes. *Journal of Research in Music Education*, 44-4, 328-340.
- Fung, C. V. 1996 Musicians' and Nonmusicians' Preferences for World Musics: Relation to Musical Characteristics and Familiarity. *Journal of Research in Music Education*, 44-1, 60-83.
- Hennessy, S. 2005 'Taiko SouthWest': Developing a 'new' musical tradition in English schools. *International Journal of Music Education*, 23, 217-226.
- 桂直美 2002 音楽活動を含む「総合的な学習の時間」の展開－国際理解と音楽教育－, 学校音楽教育研究: 日本学校音楽教育研究会紀要 6, 12-18.
- 川北雅子 2006 バリ島の芸能・音楽の教材としての価値－バリ・ガムランの授業実践を通して－ 音楽教育実践ジャーナル, 4-1, 58-65.
- Kratus, J. 1993 A Developmental Study of Children's Interpretation of Emotion in Music. *Psychology of Music*, 21, 3-10.
- Leblanc, A. 1987 The development of music preference in children. In J. C. Peery, I. W. Peery & T. W. Draper

- (Eds.), *Music and child development*, 137–157.
- MacDonald, R. A. R. & Miell, D. 2000 Creativity and Music Education : The Impact of Social Variables. *International Journal of Music Education*, 36, 58–68.
- McKoy, C. L. 2003 A Review of Research on Instructional Approach and World Music Preference. *Update : Applications of Research in Music Education*, Fall–Winter, 36–43.
- 皆川厚一 1998 『ガムランを楽しもうー音の宝島バリの音楽ー』音楽之友社
- McCrary, J. 2000 Ethnic Majority/Minority Status : Children’s Interactions and Affective Responses to Music. *Journal of Research in Music Education*, 48–3, 249–261.
- Nakazawa, N. 1988 School music, environment, and music preferences : A comparison of Japanese students living in Japan and Japanese students living in the United States. *Dissertation Abstracts International*, 49, 2575 A.
- ラドシー, R. E. & ボイル, J. D.／徳丸・藤田・北川共訳 1985 『音楽行動の心理学』音楽之友社
- Shehan, P. K. 1985 Transfer of Preference from Taught to Untaught Pieces of Non-Western Music Genres. *Journal of Research in Music Education*, 33–3, 149–158.
- Shehan, P. K. 1984 The effect of instruction method on preference, achievement, and attentiveness for Indonesian gamelan music. *Psychology of Music*, 12, 34–42.
- 谷口高士 1995 a 音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情状態尺度との関連の検討, *心理学研究*, 65, 463–470.
- Volk, T. M. 1993 The History and Development of Multicultural Music Education as Evidenced in the Music Educators Journal, 1967–1992. *Journal of Research in Music Education*, 41–2, 137–155.

参考文献

- Brittin, R. V. & Sheldon, D. A. 1995 Comparing Continuous versus Static Measurements in Music Listeners’ Preferences. *Journal of Research in Music Education*, 43–1, 36–46.
- Dunbar-Hall, P. 2006 An Investigation of Strategies Developed by Music Learners in a Cross-Cultural Setting. *Research Studies in Music Education*, 26, 63–70.
- Fung, C. V. 1994 Undergraduate Nonmusic Majours’ World Music Preference and Multicultural Attitudes. *Journal of Research in Music Education*, 42–1, 45–57.
- 金森幸樹 1999 日本音楽および民族音楽の学習, 学校音楽教育研究 : 日本学校音楽教育研究会紀要 3, 108–115.
- 川北雅子 1999 日本音楽および民族音楽の学習, 学校音楽教育研究 : 日本学校音楽教育研究会紀要 3, 108–115.

ガムランの実験で使用した曲

曲名	演奏	タイトル 発売元
GORA MARDAWA	CANDRA METU	“KREASI PILIHAN KHUSUS KARYA NYOMAN WINDHA, SSkar” BALI RECORD
JARAN TEJI	LKB SARASWATI	“MUSIK PENGIRING TARI” 非売品
KATAK NGONGKEK	KAYUMAS KAJA BADUNG	“GAMBELAN GENDER” BALI RECORD
LEGONG KERATON LASEM より “CONDONG”	GUNUNG JATI	World Music Library “輝きのスマル・ブグリンガン” キングレコード
MANUKRAWA	STSI	“Dancers of Bali VOL.2” MAHARANI RECORD/RICKS RECORDS
OLEG TAMULILINGAN	KOKAR DEMPASAR	“BERAJAR MENARI” BALI RECORD
PUSPA WRESTI	STSI	“Dancers of Bali VOL.2” MAHARANI RECORD/RICKS RECORDS
SEKAR GINOTAN	Br. BABAKAN DESA SUKAWATI	“GENDER” MAHARANI RECORD/RICKS RECORDS
TABUH GARI	STSI BALI	“Tabuh Semar PegulinganSa Pitu” BALI RECORD
TARUNA JAYA	SADHA BUDAYA	“Dancers of Bali Part 1” MAHARANI RECORD